斎藤美麿教授　略歴と業績（抄）

＜略　歴＞

１．学　歴

1947年２月　新潟県に生まれる
1969年３月　新潟大学教育学部小学校教育学科卒業
1972年３月　東京大学大学院教育学研究科体育学専門課程
　　健康教育学専攻修士課程修了
1974年３月　東京大学大学院教育学研究科体育学専門課程
　　健康教育学専攻博士単位取得退学

２．職　歴

1969年４月　東京大学教育学部健康教育学科研究生（1970年３月迄）
1974年４月　国立特殊教育総合研究所運営部専門職員
1975年８月　国立特殊教育総合研究所研究員
1987年１月　国立特殊教育総合研究所病弱教育研究部主任研究官
1994年４月　山口女子大学社会福祉学部教授
1996年４月　山口県立大学社会福祉学部教授
2011年２月　逝去

３．専門分野　障害児者教育・病弱児教育関係

所属学会：日本学校保健学会　日本特殊教育学会　日本行動計量学会
講義科目：障害者教育総論　病弱者の生理・病理　病弱教育　特別支援教育実習
　　特別支援教育実習事前事後指導　教職総合演習　教育方法学　等
社会活動：山口県巡回就学相談委員　NPOおいでませ監事
　　山口ベトナム友好協会副会長　等

＜主な研究業績＞

１．著　書

１）『吃音児早期教育の手引き』　共著　1978年　財団法人心身障害児教育財団
２）『学童吃音指導の手引書』　共著　1979年　財団法人心身障害児教育財団
３）『言語障害治療教育』　共著　1982年　福村出版
４）『FORTAN初級講義』　単著　1985年　神奈川情報文化専門学校
５）『ニュー・幼児の健康』　共著　ぎょうせい
６）『心とからだの発達とヘルスカウンセリング』　共著　1991年　学習研究社
７）『日本学校保健学会50年史』　共著　2004年　日本学校保健学会
８）『視覚障がいと点字の世界』　共著　2008年　ふくろう出版
９）『発達障害の理解と支援』　共編著　2009年　ふくろう出版

２．論　文

１）「アイオワ州における福祉の現状」共著　1991年　学校保健研究　33巻12号
２）「米国の特殊教育」単著　1991年　世界の特殊教育（Ⅴ）
３）「喘息児における呼吸機能の客観的測定値と主観的症状」共著　1994年　特殊教育学研究　32巻１号
４）「障害児の健康管理に関する研究」単著　1995年　山口女子大学社会福祉学部紀要　創刊号
５）「特殊教育諸学校における健康情報の管理」単著　1997年　山口県立大学社会福祉学部紀要　第４号
６）「喘息児の呼吸機能の推移とその認知の改善」単著　1997年　特殊教育学研究　第37巻１号
７）「心身障害のある児童等への水中指導」単著　2002年　山口県立大学社会福祉学部紀要　第８号
８）「ダイオキシンのリスクアセスメントのための疫学的研究」共著　2003年　厚生科学研究費補助金　生活安全総合研究事業
９）「中国に本を送る」単著　2004年　山口県立大学社会福祉学部紀要　第９号
10）「心身障害のある児童等への水中指導2」単著　2004年　山口県立大学社会福祉学部紀要　第10号
11）「中国青島市盲学校との学術交流」単著　2004年　教育保健研究　13号

３．事　典

１）「利き手検査」「左利き」『言語障害事典』共著　1979年　岩崎学術出版
２）「発達予測」『心身障害教育と福祉の情報事典』1989年　同文書院

４．研究報告

１）『慢性小児腎疾患児の学校教育調査報告書』共著　1988年　国立特殊教育総合研究所　病弱教育研究部報告書
２）『普通小学校・中学校に在籍する小児慢性腎疾患児の教育について』共著　1990年　国立特殊教育総合研究所病弱教育研究部報告書
３）『養護学校における教育と医療の連携に関する研究調査報告書』共著　1992年　国立特殊教育総合研究所病弱教育研究部報告書

５．学外研究助成

・文部科学省科学研究費補助金（1985～1987年）一般研究Ｃ「病弱児の身体の訓練に関する研究」
・文部科学省科学研究費補助金（1995～1997）基盤（一般）研究Ｃ「てんかん児の行動観察システムの開発に関する研究」（研究代表者 宮城教育大学 村上由則）研究分担者

特別寄稿

故斎藤美麿教授とのNPO活動について

NPO-OIDEMASE代表　岩　本　　晋
Shin IWAMOTO

本文は2011年２月27日に逝去された故斎藤美麿教授を追悼する文章として、本紀要編集者から依頼がありましたので、大学外の友人の一人として岩本晋が書きました。

最後の日々

先生が亡くなられる寸前まで、呼吸は荒いが苦しむ様子の無い先生の横顔を、ご家族の傍にたたずみながら、あなたが、まもなく亡くなる人になるとは、私には信じられませんでした。2011年２月７日の午後に、NPO仲間の県大教授から斎藤先生が入院されましたとメールが届きました。山口日赤病院に駆けつけると、検診で肝臓がんが見つかり、転移もあり治療もできない、手遅れだと言われたと、寂しそうな顔で話しておられました。それから２週間で自宅での在宅医療を開始し、訪問看護を受け始められたばかりでした。

数年前になりますが、NPO活動の最中に、脳出血のために先生は死にかけたことがありました。ほとんど助からない命だったようですが、倒れたところがお寺の境内で、仏の力と看護師のお嬢さん、そして山口日赤病院の適切な処置・リハビリ治療で、まったく後遺症が無いと言えるほど見事に回復されました。

このたびも医学的には６カ月の余命と宣告されても、在宅医療・看護で対応すれば、この世には奇跡的な話も無いわけでないし、まだまだ尽きない話を充分にできる月日は残されていると信じて、３日ごとに先生を訪ねて話し込みました。金曜日の夕方には、私と彼が共に理事である福祉生活協同組合「さんコープ」に、翌週から訪問介護を始めてくれるように手配を済ませたばかりでした。

ところが、日曜日の朝に今夜まで持たないかもしれないとの電話をご家族からいただき、家内ともども大慌てでお宅に伺いました。入院から3週間目でした。あまりにも早い展開に、目の前の事実を認められなくて、私は涙をこらえる事が出来ませんでした。先生は、さほど苦しむ様子もなく、いつものほほえみの残るお顔を持ち続け、穏やかに、静かに、最期を迎えられました。

最初の出会い

私と斎藤教授との最初の出会いは、1996年４月山口県立大学に看護学部が創設され、公衆衛生学担当教授として山口大学医学部公衆衛生学講師から私が移籍した時です。それ以来の15年間、斎藤先生は県立大教授としてご活躍でしたが、私は保守的な山口県の風土を変えようと、野党の民主党候補として参議院選挙に出馬し、続いて衆議院選挙にも挑戦するなど、大きな変化がありました。今でこそ政権与党になっている民主党ですが、当時はひ弱な政党でした。私は今でも民主党山口の幹事として地域高齢者の医療や福祉のあり方について提言を行う役目を担っていますが、私が選挙に出ると決めたとき、彼からは「よく分からんが応援する」と励まされ、それ以来、立場の変化を乗り越えて付き合ってきました。

私と彼は、考え方が似ているというか、思考回路が同じなのか分かりませんが、高齢者問題や障害者問題について論ずるとき、二人の間に対立はありません。実践を通じての理論に興味がありましたから、研究分野を超えた社会活動として二人で「NPO-OIDEMASE」を創設しました。それ以来、ベトナムの枯れ葉剤によるダイオキシン被害者の問題などを通じて、障害者対策について大変多くの事

を、私は彼から学びました。私たちそれは互いに刺激的な存在となることができました。私達は、彼特有の表現である「弱いものの立場に近づいてみる」ということで地域医療のあり方や障害者の生活に焦点をあわせて議論を展開するということを、あきることなく続けてきました。

大学（県立大）では、組合委員長を二人とも経験しましたし、自治労組合が創設した山口県地方自治研究センター理事長に私が就任したときには、その理事になっていただきました。そのほか、県内の他大学の公衆衛生学の講義なども、私からの依頼をほぼ全部引き受けてくださいました。

二人のつきあいは研究だけでなく、スキーも水泳も上手な彼は、下手な横好きのレベルの私の良き指導者でした。プールにもゲレンデにも何十回と一緒に通ったものです。今年も女鹿平スキー場に何時でもいけるように準備していました。本当に気の合う行動も似通った仲間でしたから、彼の死去は私のすべてを失ったくらいの衝撃でした。

研究活動

先生は昭和22年２月20日生まれですから、64歳になられたばかりです。新潟大を卒業後は東京大学大学院に進まれ、国立特殊教育総合研究所の聴覚言語障害教育研究部や、病弱教育研究部で障害者教育について、20年近く研究生活を続けられました。47歳頃、平成６年に東京から山口県立大教授として赴任されました。先生の主な著書・論文として、『視覚障害と点字の世界』（2008　ふくろう出版　共著）、『発達障害の理解と支援』（2009　ふくろう出版　共著）などがあります。

先生が専門としていたのは障害児教育でした。彼の障害者対策は、私達の手本でありました。障害児教育であれ、学校保健分野であれ基本に忠実でした。なかでも障害児へのプール指導は、実際に裸の付き合いを障害者と繰り返しながら信頼を勝ち得て教育効果を得ると言う、まさに教育のあるべき姿でした。県立大学生対象の冊子の中に、学生への教育論として、「障害児と接触するにはまず好かれることです」「誰からも好かれる状態になりましょう」と書いておられます。ひょっとしたら、私や留学生達と仲良くなれたのも、この思想だったからかもしれません。

たとえば、留学生は日本に来たばかりの時は、生活や習慣も違い戸惑うことも多く、日本人学生よりもハンデイをもっています。そのハンデイを克服するために、日本の生活習慣に一時も早くなじむことの出来るように、自宅を開放しての芋煮会を催しておられました。毎年の山形風習の芋煮会はおいしくて楽しいので多くの留学生が参加していました。それが発展して、NPO-OIDEMASEの「篠目の会」となっています。「篠目の会」とは、山口市篠目のSL列車の停まる篠目駅近くに大きな日本家屋を家主である、会員・藤井さん宅を解放してもらい、留学生や、斎藤先生知己の人々が全国から駆けつけて、芋煮やそうめん流し、餅つきなどを楽しむ会です。

私との協同研究で最後となったのは『在宅看護における認認介護の出現率－組合員２万人及び介護事業所507ヶ所調査結果－』でした。その成果はISSN0919-8903「自治研やまぐちNO73、p8-31、2010年９月発行」に私が報告しました。要約すると、２万人の家族に親の介護についてアンケートをして、在宅介護を実施している家族の介護の状況を分類。一方で在宅介護を支援する介護保険事業所500カ所の調査で、在宅介護を実施している中での「老老介護」世帯数、老老介護世帯の中での認知症介護と、認認介護世帯の割合などを推計したものです。結果として老老介護状況にある世帯の10％が認認介護になっているという悲惨な状況を明らかにすることができました。

NPO-OIDEMASEでの活動

①山東省曲阜大学への図書贈呈活動

斎藤先生が発案してNPO-OIDEMASEが中心となって活動してきたことは数多くあります。その一つが、日本語を学ぶ外国の大学に日本語の図書を送る活動です。その結果、中国の曲阜師範大学の図書館にOIDEMASEと看板を掲げた文庫が作られました。斎藤先生が県大から中国に研究のために派遣されていたときに、日本語学科の生徒達の熱心な勉強風景、日本では見られないほどすさまじい学生の熱意に応えるために、日本語の図書を送ろうと始められました。少子高齢化の続く日本では、学校が統廃合で図書室がつぶされ図書が焼却されていました。

中国・山東省の曲阜には孔子廟があり、ユネスコから世界文化遺産に指定されている聖地の利を生かした、曲阜師範大学（孔子文化大学）があり、山口県立大学は曲阜師範大学と学術交流協定を結び、教員の研究交流のほか学生の相互交流を行っています。その中国の大学における日本語学科の最大の悩みは、日本語で書かれた書籍の絶対的な不足で、日本語教育の質を高めるためには、日本語で書かれた書籍や教科書が必要だと分かってはいるものの、高価なため揃えることが出来ないとのことでした。そこで、斎藤教授が現地の深刻な悩み解決の一助にと、OIDEMASEが仲介して、中国に日本語書籍を贈呈することにしました。書籍は、斎藤教授と同時期に曲阜師範大学に神奈川県から派遣されていた教員・鈴木啓之さんが、神奈川県で廃校となった学校図書の本を確保し、曲阜師範大学への書籍は、いずれ廃棄される本を有効に利用することでもあり、環境保護や無駄を少なくするという観点から、OIDEMASEの活動目的に合致するので、中国へ輸送の手続の一切の面倒を見ることとしました。

中国での受け入れは、曲阜師範大学の外国部学部日本学科主任袁广泉老師を受取人とし、下関から船が着く青島市の青島国際交流中心（代表　王雪梅）が行いました。輸送する書籍は2,172冊、789キロ、ダンボール箱にしての51箱もあり、輸送通関のためには、箱単位の書籍名と、古書としての価格、箱それぞれの重さ、大きさ（縦×横×高さ）が必要で、斎藤教授の活動に共感した県立大のボランテイア学生が、約二週間の作業を行いました。

②日中の盲学校交流

斎藤先生の主要な活動対象であった障害者教育についても提案は多種多様でした。NPO法人OIDEMASEは、盲聾などの障害者の海外旅行の機会を作ることと、中国の障害教育関係者との交流を目指して、山口県内の盲学校関係者、特に障害のある盲・聾者の希望者を募り、団体として青島を訪問しました。次には青島盲学校の関係者を山口県に招待しました。障害者が海外旅行する機会が少ないなかで斎藤先生の行動力に関係者は深く感銘を受けたものです。

中国からの訪問団は青島盲学校の袁凱道・福校長を団長、青島大学の李俄憲教授を副団長とした盲学校の関係者５名です。張寄崗、青島盲学校按摩センター主任も来られましたので、山口市湯田にある有料老人ホーム共済苑（市内湯田に岩本晋が開設し現在83床）では按摩を通じた技術交流会を開きました。

③ダイオキシン被害者支援活動

私は、ミシガン州立大学大学院でPCBの毒性学を学んだ公衆衛生の専門家でしたから、県立大に在籍中に厚労省の科学研究費（平成11年～13年：「ダイオキシンのリスクアセスメントのための疫学研究」）を、岩本晋・斎藤美麿・小川雅広他５人の連名で申請して、OIDEMASEの名前でベトナムのダイオキシン被害者の調査研究に乗り出しました。斎藤先生の担当はダイオキシン被害の障害児教育への援助等の活

動でした。小川先生はコメのルーツであるベトナムでの農村地帯の生活を調べることでした。

この研究の結果、戦後の長い年月でベトナム戦争中の枯れ葉剤も減衰していると考えられていたが、アメリカ空軍基地の跡地であるダナンでは私達の調査でもきわめて高濃度の汚染（ホットスポット）が確認されました。原因は、終戦時にきわめて大量の備蓄してあった科学薬品類をドラム缶のまま、空軍基地内の池や湖、あるいは谷間に放棄したり埋め立てたりしていたために、これまで誰も気がつかなかったものが、戦後25年も経過してドラム缶が朽ちて内容物が浸出することにより、地下水を通じて周辺地域住民に多大な被害（新生児、死産や先天性奇形）を継続的にもたらしていると推測することができました。

平成13年度も引き続き、ベトナムの枯れ葉剤被害者救済委員会（Agent Orange Victims Fund）の許可を得て、ベトナム赤十字やハノイ医科大学と共同で日本側のNGO-IMAYA（「海外医療協力山口の会」・本部下松市）を中心に作業を展開しました。採集したダイオキシン試料をハノイ医科大より福岡県に持ち帰る時、９月11日のテロ事件から数日しか経過してなかったため、香港空港での警戒体制は極度に緊張し、荷物のダイオキシン冷凍試料の説明を求められたので、私が「化学物質で最も毒性の強い物質」と説明したことから、誤解が生じ、試料の持ち込みを拒否・没収されてしまいました。このことがその後の研究活動に大きな障害となるなど、ニューヨークのテロ事件の余波が我々の研究活動に及ぶとは想像もしていませんでした。

だがしかし、その後平成14年の３月３日から６日まで、ハノイにて、アメリカ・ベトナム共同でダイオキシン国際会議が開催され、我々の研究チームを構成しているハノイ医科大のバン教授やフイ・フイ教授の、さらにはツオン副学長と、私達の日本側スタッフ飯田氏（福岡県環境保健所所属）の研究が重要であると、学会長のコメントが発表されたことは輝かしい成果として、忘れられない出来事でした。さらに、ハノイ医科大のLe Cao Dai教授と面談し、10-80 Committee [1] で収集した第一級の史料を贈呈され、さらに著書を日本語に翻訳する許可をいただきました。Dai教授はベトナム統一のための戦いにおける多くの出来事への目撃者であり、何年間も10-80 Committeeで活躍されてきた方で、アメリカ軍がベトナムで使用した毒性の化学物質についての国内外の国際会議、セミナーに参加し、発表を続けてこられた医学者です。

注

（１）10-80 Committeeは「ベトナムでの化学戦争の結果の国家調査委員会」の略称で、これは、委員会が設立された日付1980年10月。

最後に

斎藤先生への思い出として、世界の食べものと先生の関係を抜かすわけにはいきません。中国大陸や、アメリカに研究者として留学した時もそうだったとのことですが、ベトナムやカンボジアへ、ダイオキシン被害者の特殊教育研究のため一緒に行ったときは、私達が数十回も訪れている国についての食文化について豊富な知識を披露されて、食べられない物は無いという食道楽の生活をされておられました。

ベトナム障害児施設にて2009／2／17

この山口県でも萩市大井の中原淡水センターの鮎料理をはじめとして山口県民の私が知らないところを次々と紹介してくだ

さり、一緒に行きました。葬儀の時に弔文で申しあげましたが、「ここに参列している関係者だけでなく、参列できなかった膨大な数の教え子や関係者に、早くおいでよこちらは天国だよと言わないでください。いずれそちらに行くまでは、残されたご家族、点字通訳などの福祉活動に活躍されている奥様や、医療現場で活躍されているお嬢様達と、かわいい盛りのお孫さん達の将来のために、住みやすい社会や日本、世界を造るため・近づく努力をしながら、その日の来るのを待っていますから。暫くは斎藤先生とさよならしておきます。」

友人代表として、
NPO-OIDEMASE 代表　岩本　晋